

「わたしの持病」

元 測機舎 石井 洋

私の持病の一つに、日食病というのがある。コレは一度日食を見ると感染し、その潜伏期間は、次の日食が起こるまで。発病すると有効な治療法はなく、対処療法として日食を見に行くことだけであり、いったん症状は治まるが、それも次の日食までの間といった厄介な病気である。感染したのは1983年、以下は、私の闘病記録である。

1991年の入院先（観測地）は、晴天率が90%というカリフォルニア半島の先端の町、サンホセ・デルカボ市。人口2万人弱の地に同じくらいの観光客が黒い太陽を目指して訪れるという。このあたりは米国の避寒地であり、大物フィッシングやマリンスポーツが楽しめるリゾート地でもある。

下見を既に済ましてある観測地は、郊外の丘の住宅造成地。日食当日は、雲一つ無い快晴であった。気温は、日中40度近くまで上がると脅かされていたが、乾燥しているせいか苦にならない。器材のセッティングを終えた頃には、約7分のクライマックスを含む約3時間の天体ショーが静かに始まっていた。周囲には当日現地入りしたアメリカ人や、日本人の望遠鏡を覗いて歓喜する地元の家族連れで賑やか。警備担当の軍人が機関銃を片手に周囲を見回っている。

予定通り太陽はどんどん欠けていくが、周囲はサングラスをかけたほどにしか変化を感じない。9割ほど欠けてくると、気温が下がったのが肌寒さを感じることで分かる。いよいよクライマックスの始まりである。太陽の光が月の谷間から漏れるだけになる。その瞬間を皆が固唾をのんで待ち受けている静寂の

中、シャッターの音だけが響く。誰かが「シャドー・バンドが見える！」と叫ぶ。点光源になった太陽の光が大気の揺らぎによる屈折現象で作る陽炎が大地を走るのだ。何度体験しても、この世とは思えぬ不思議な雰囲気。興奮が高まって、鳥肌が立ってくる。



皆既中の太陽～白いコロナが輝く

紺色になった空には、金星や木星が輝きだし、周囲の地平線は夕焼けに変わる。わずかに残った太陽の光も月に覆い隠されてしまうと、周囲からは一斉に拍手と歓声が沸き起こった。紺色の空に真っ黒な太陽、それを取り囲むように真珠色のコロナが輝きだす。太陽の見かけの3倍以上に広がった、太陽活動期のコロナだ。真紅のプロミネンスも見える。興奮しながらシャッターを押し、双眼鏡で眺めていると、7分があっという間に過ぎていく。やがて反対側の月の谷間から太陽の光がこぼれ出す。2～3粒のダイヤをちりばめたようなダイヤモンド・リングが空に輝いた。再び歓声上がり、拍手とシャッター音が鳴り響く。月の影は、カリフォルニア半島を横切り、メキシコ本土に向けて走り去っていく。

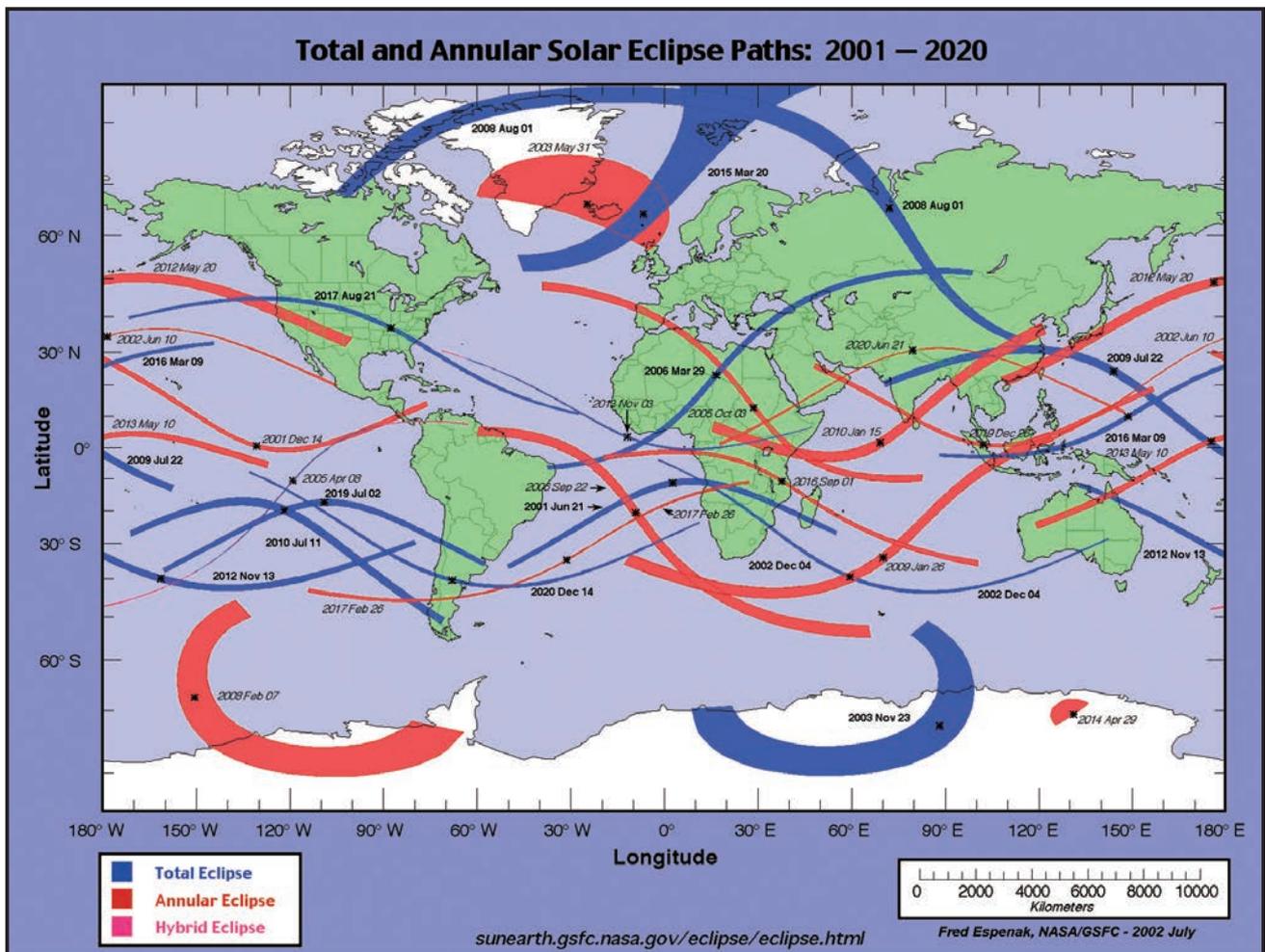


ダイヤモンドリングと赤いプロミネンス

この後ぐんぐん光を取り戻していく太陽。地上は元の明るさを取り戻し、さっきまでの興奮が嘘のように普段の景色に戻っている。遠くにカリフォルニア湾の白い波が見えた。帰国までの数日間は、真っ青な空と海の中

で過ごした。次の日食は、陸地を殆ど通過しない来年のものを除くと、1994年11月3日南米ペルーで見ることができる。マチュピチュ遺跡やナスカの地上絵、4000m級のアンデス山脈の中で見る日食は、今までモノ以上すばらしいモノになるだろう。真っ黒な太陽と南半球の星空は、3年先とはいいながら、既に私の身体を蝕んでいるようである。

これを書いてからすでに20年以上も経ったが、病は治ってはいない。この現象は、いつどこで見られるのか、計算できるのだから始末に悪い。下図は日食予報図である。皆既食を示す青い帯状のどこかにまた立つのであろう… まったく怖い病気である。皆様もお気を付けあれ。



<http://eclipse.gsfc.nasa.gov/SEatlas/SEatlas3/SEatlas2001.GIF>より